

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00082

研究課題名（和文）ヴィクトリア時代における「教養」の意義と社会包摂に関する総合的研究

研究課題名（英文）Culture and Social Inclusion in Victorian Britain

研究代表者

崎山 直樹（Sakiyama, Naoki）

千葉大学・大学院国際学術研究院・准教授

研究者番号：10513088

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、イングランド、アイルランド、スコットランドでの文書の調査を踏まえ、「教養」の思想に歴史的展開に関する思想史的なアプローチ、ヴィクトリア時代の「教養」と社会との関係に関する思想史的なアプローチ、ヴィクトリア時代における教育改革と任意団体の役割に関する歴史研究、という三つのアプローチを試みた。

成果としては、18世紀以降のロマン主義の受容を通じた社会認識の変化と教育改革の関係性、社会進化理論の進展と社会を統制したいという欲望の浮上、そしてそれらを踏まえた「公」と任意団体を主体とする教育改革の推進によって、教育を通じた「包摂と排除」が進行していくプロセスを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトの学術的意義は、ヴィクトリア時代の社会を教育改革というテーマで思想史および歴史学の双方からアプローチした点にある。18世紀以降の長い時間軸の中で、思想がどのように形成され、それが人々の行動をどのように規定し、それが実際の行動をどのように制約していったのかを、総合的に分析することができたことが、本研究の学術的意義である。

また、このプロジェクトで得た知見や視座から、現代日本の大学教育改革について分析を行った。大学改革の直中で身を置きながらも、近視眼的な分析に陥らずに、俯瞰的に状況を把握し、今後の展望を含め議論を展開できたことには社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Based on a survey of historical documents in England, Ireland, and Scotland, this study addressed three research questions: the historical development of the idea of “culture”; “culture” and social evolutionary theory in the Victorian era; and educational reform and the role of voluntary associations in the Victorian era.

The results of the study showed that “inclusion and exclusion” through education progressed as a result of the relationship between changes in social perceptions and educational reform through the acceptance of Romanticism after the 18th century, the development of social evolutionary theory and the emergence of the desire to control society, and the promotion of educational reform mainly by the “public” and voluntary organizations based on these changes.

研究分野：西洋近現代史

キーワード：ヴィクトリア朝 ブリテン アイルランド 教育 教養

1. 研究開始当初の背景

ヴィクトリア時代のイギリスは、「長い 18 世紀」の名誉革命体制から 20 世紀型の現代社会にいたる過渡期と捉えられる。従来の社会が前提としていた「公」概念は、改革の時代を経て、見直されていくことになる。特に、国教会という理念と結びついていた「公」は、その意味内容が急速に問い直されていった。メリトクラシーと呼ばれる統治エリートの選抜と権力の委託のシステムが構築されるなかで、新しく勃興してきた中産階級に権限が委譲されるとともに、そうでない人々との差が強調されるようになった。この「卓越性」を巡る仕掛けはヴィクトリア時代に整備されていった初等・中等・高等教育というルールを通じて展開されることになる。これはアイルランドのカトリックをも含む中産階級を新たな統治エリートとして包摂してだけでなく、産業化と都市化に伴う新しい労働者層をどのように「公」に包摂するのかという課題も浮上した。いわば、地理や宗教など横への「公」の拡張と階層を下る縦への「公」の拡張が求められたのである。

本研究では、ヴィクトリア時代における「公」の拡張と教育システムの拡充を、包摂と排除という観点から再検討するものである。社会構造や産業構造の変化に伴い、「公」空間も再編される中、誰がそこに関与することができるのか、あるいは関与することが期待されていたのか。そしてそれは何をもって正当化あるいは正統化されていたのか。教育は教養の有無による「卓越性」の創出あるいは再生産にどのような役割を果たすべく、どのような過程を経て整備されていったのか。これが本研究が提示する学術上の問いとなる。

2. 研究の目的

本研究は、「長い 18 世紀」から 20 世紀型現代社会にいたる過渡期であるヴィクトリア時代における教育を通じた社会統合の諸相を、「教養」と「包摂と排除」という観点から総合的に検討を行う。そのために、近代における社会と教育との関係を、初等中等教育、職業教育・成人教育そして高等教育までを含んで俯瞰的に考察する。

まずは教養という概念の整理も検討する。これまで教養という概念は英語からの翻訳として、Culture, Arts, General Education, といった様々な言葉の訳語として用いられてきた。これらを日本語の教養という単語に当ててきたことが問題であったわけではなく、ヴィクトリア時代の英語圏の社会においても、概念の整理ができないまま、複数の用語がある部分においては重なりあいながら、ある部分においては違う文脈に接続されながら、混在しながら使用されてきた。同時並行で進められる新しいタイプの教育機関の登場や、教育への期待の変化、そして制度の整備が進んでいく中で、用法の揺れは解消されぬまま継承されていった。本研究では、教養概念を、少し古い時代からのテキストおよびコンテキストに拠りながら、再整理を目指す。

さらに教養という観点と合わせ「包摂と排除」という点からヴィクトリア時代の教育制度の整備のプロセスを検討する。この時代はメリトクラシーと呼ばれる統治エリートの選抜の新方式が定着する時代である。この仕組みはブリテンの中産階級を対象とするだけでなく、アイルランドのカトリックも、そして産業化と都市化に伴う新しい労働者をも含んで拡大していった。このような地理や宗教など横への「公」の拡張と階層を下る縦への「公」の拡大を、同時代における「教養」概念を整理した上で、教育を通じ誰が「公」への参加が可能となり、誰がそこから排除されていったのかを、アイルランドおよびブリテンの具体的な空間を対象に総合的に分析する。また、この「包摂と排除」を支えた理屈にも焦点を当てる。

3. 研究の方法

研究の方法としては主に三つのアプローチを試みた。

(1) 「教養」の思想の歴史的展開に関する思想史的なアプローチ

ヴィクトリア時代における「教養」概念がどのようなものであったのかを考えるために、18 世紀から 19 世紀にかけての概念の変遷を辿る。特にロマン主義との関係を中心に、思想史的なアプローチを試みる。

(2) ヴィクトリア時代の「教養」と社会との関係に関する思想史的なアプローチ

ヴィクトリア時代における「教養」概念を、この時代に勃興する社会進化論との関係から捉えようと試みる。前述したロマン主義を対象とする研究とも重なる面があるが、科学技術の発展、産業経済状況の急速な変化の中で、同時代の思想家たちが、自然と文明との関係をどのように捉え、その対立の中で科学技術と道徳をどのように配置していたのかを明らかにする。またスペンサーに注目し、スペンサーの「総合哲学大系」の編成の過程に、同時代の科学観の変化や社会情勢がどのように影響を与えたのか、またそれと共に「教養」がどのように認知されるようになったのかを検討する。

(3) ヴィクトリア時代における教育改革と任意団体の役割に関する歴史研究

1830 年代以降、国民教育制度の整備を皮切りに国家事業としての近代的教育制度の整備が開始されていく。この上からの教育改革を社会はどのように受け止め、どのように対応していった

のか。アイルランド、ブリテンの幾つかの任意団体の活動に注目し、教育改革の受け止められ方および活動を通じて生成される「教養」概念のあり方を検討する。

4. 研究成果

(1) 「教養」の思想の歴史的展開に関する思想史的なアプローチ

ブリテンにおける「教養」の思想の歴史的展開を、18世紀から19世紀までたどる作業を行った。その概要の一部は、小田川によって2021年3月のセッション「ヴィクトリア期における教養と一般教育の思想」で報告され、『イギリス哲学研究』45号(2022年3月)に掲載された。また2022年3月の日本イギリス哲学会第46回研究大会でのシンポジウム「S・T・コウルリッジのロマン主義：近代社会の限界と可能性」において小田川が「イギリスロマン派第一世代としてのコウルリッジ」というタイトルで報告した。(『イギリス哲学研究』46号、2023年3月に掲載)た。また、副産物として、大石和欣編『コウルリッジのロマン主義：その詩学・哲学・宗教・科学』(東京大学出版会、2020年、vii+512頁)の書評が『イギリス哲学研究』45号(2022年3月)に掲載され、また、「文芸共和国」の一員としてトマス・ホップズを捉え直した項目「ホップズ」が日本18世紀学会啓蒙思想の百科事典編集委員会編『啓蒙思想の百科事典』(丸善出版、2023年1月)に収録された。

本研究プロジェクトとの関わりにおいて、強調したい成果としては、コウルリッジに代表されるイギリス・ロマン派は、フランス革命で挫折を経験し、自我と世界との分裂を強く意識するに至ったが、それはヴィクトリア時代の代表的な教養的知識人であるJ・S・ミルに評価され、継承されていたということである。自我と世界の分裂を、主観的自我の肥大によって克服するコウルリッジの思想は、客観的世界からの撤退というロマン派の呪いとなって、彼の影響を受けた教養知識人たちを呪縛することになった。

(2) ヴィクトリア時代の「教養」と社会との関係に関する思想史的なアプローチ

ヴィクトリア時代における「教養」のあり方を検討するために、主に藤田が、ハーバート・スペンサーに注目し、研究を進めた。その成果は「スペンサーの進化社会理論と政治思想」『ハーディ研究』49号(2023年9月)に掲載された。

本研究課題との関連するポイントは主に二点ある。一つは、ヴィクトリア時代に社会ダーウィニズムや進化社会理論が発展する背景として、特に初期スペンサーの思想を検討することで、社会的弱者に対するまなざしのあり方が浮き彫りされる。それは「最大幸福」を実現する理想社会に至る「文明化」の過程の中で、社会に適応されない不定者の苦境を説明し、それに対する「しつけ(discipline)」という概念が浮上していく点にある。またもう一点が、スペンサーによる「総合哲学大系」は因果決定論に基づき、科学によって基礎づけることが目指されていた点にある。これら二点のあり方は、ヴィクトリア時代の「教養」を考える上で重要な視座を提供することになる。つまり、例えば貧困のような社会課題について、道徳的な意味付けとともに「科学的なアプローチ、この双方が同時に検討されるのがこのヴィクトリア時代の特徴であり、新しい「科学」である統計学、そしてそこから派生していく因果決定論によって、社会の複雑さを明らかにすると同時に、統制したいという欲望が浮上していく。このような心理的な変化がこの時代の教育改革を下支えしていた。

(3) ヴィクトリア時代における教育改革と任意団体の役割に関する歴史研究

ヴィクトリア時代における教育改革と任意団体の役割に関しては、主に二つの側面から、主崎山が中心となって、検討を進めた。まず一つ目のアプローチとして、国民統合のための教育改革というテーマで、トマス・ワイズによるブリテン政府による国民教育制度の普及、そしてそれに呼応するようにアイルランド側からおこる地方大学誘致の陳情のプロセスを明らかにした。これは2021年3月のセッション「ヴィクトリア期における教養と一般教育の思想」で報告され、『イギリス哲学研究』45号(2022年3月)に掲載された。

もう一つのアプローチがブリテン市民社会の内部での動きである。これについては国民教育制度の普及を下支えするための組織として結成された「中央教育協会」に注目した。同団体が発行した機関誌に投稿された論文の分析を行い、会員たちの職業教育、成人教育に関する興味関心や統計学的な見地からの社会改良運動との連関などが明らかになった。この研究成果については、2023年7月に研究会報告を行った。

ヴィクトリア時代において、カトリック解放以降、アイルランドのカトリック信徒をどのように社会に取り込んでいくのかが社会課題となり、そのための政策として国民教育制度が導入される。またその普及を支えるべく各種任意団体が主導となり、教育普及および教育実践を通じたノウハウの蓄積、共有が図られていった。その射程は初等教育に限定されず、職業教育、成人教育、高等教育にも及んだ。またこの時期の教育において重要な点は、同時期に注目される統計学とそれに由来する知見である。これが教育に新しい「教養」の一部として取り入れられる一方で、社会改良運動と連動し、「排除」の理論を強化していく側面もあった。

(4) 現代社会との対話

これら思想史的、歴史学的なアプローチに加え、崎山は現代日本の高等教育の課題について議論した『現場の大学論』(ナカニシヤ出版、2022年)に共編者として参加し、大学改革に関する論稿(「無責任な大学改革を超えて」)を寄せた。

これ以外にも学会誌における研究動向の執筆などにも取り組み、研究成果の社会への還元にも努めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小田川大典	4. 巻 46
2. 論文標題 イギリス・ロマン派第一世代としてのコウルリッジ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田祐	4. 巻 49（12）
2. 論文標題 二世紀のハーバート・スペンサー スペンサー思想史研究の主要論点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田川大典	4. 巻 49（7）
2. 論文標題 信じて、疑え：ポストモダニズムと非基礎づけ主義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 211-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田川大典	4. 巻 48
2. 論文標題 反法実証主義と動態的国際秩序観の形成：「国際秩序の法的構想」から『法と力』へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ノモス	6. 最初と最後の頁 115-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/00025110	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田祐	4. 巻 49
2. 論文標題 スペンサーの進化社会理論と政治思想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ハーディ研究	6. 最初と最後の頁 39-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小田川大典
2. 発表標題 「ヴィクトリア期のバトラーの受容：ニューマンとアーノルド」
3. 学会等名 第18回バトラー研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小田川大典
2. 発表標題 「市民的不服従をご存知か? : ウィリアム・E・ショイアマン『市民的不服従』(森達也監訳、人文書院、2022)を読む」
3. 学会等名 政治理論とインテレクチュアル・ヒストリー」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤田祐
2. 発表標題 リプロダクションと進化理論
3. 学会等名 第46回社会思想史学会大会セッション「社会思想におけるリプロダクション：社会と再生産する身体」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小田川大典
2. 発表標題 「アメリカ保守主義における「融合主義」の形成と崩壊：井上弘貴『アメリカ保守主義の思想史』（青土社、2020年）を読む」
3. 学会等名 社会思想学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小田川大典
2. 発表標題 イギリス・ロマン派第一世代としてのコールリッジ
3. 学会等名 日本イギリス哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 崎山直樹
2. 発表標題 トマス・ワイズのアイルランド教育改革論
3. 学会等名 日本イギリス哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田 祐
2. 発表標題 T・H・ハクスリーの科学論と教育論
3. 学会等名 日本イギリス哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 崎山 直樹、二宮 祐、渡邊 浩一、井上 義和、笠木 雅史、北村 紗衣、標葉 靖子、標葉 隆馬、 嶋内 佐絵、成瀬 尚志、羽田 貴史、光永 悠彦、吉田 文	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 252
3. 書名 現場の大学論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小田川 大典 (Odagawa Daisuke) (60284056)	岡山大学・社会文化科学学域・教授 (15301)	
研究 分担者	藤田 祐 (Fujita Yuh) (90710830)	釧路公立大学・経済学部・教授 (20102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------